

主体的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成を

目指した中学校外国語科の実践

—どのように生徒の姿を捉えて、授業・単元を構築すればよいか—

佐藤 大樹 高度教職開発コース

キーワード：主体的に学習に取り組む態度，自分事，言語活動，授業改善

1. 研究動機・研究問題

中学校外国語科の目標の一つとして重視されていた「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」という文言が、今回の学習指導要領の改訂によって「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」という文言に置き換わった。中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編には「『主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度』とは、授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている」と説明されている（文部科学省，2018，p.16）。さらに、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する際には、粘り強い取組を行おうとする側面と、その取組の中で自らの学習を調整しようとする側面から評価することが求められている（文部科学省，2019，p.9）。つまり、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」は新しい概念であり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度よりも広い概念であるといえる。

英語教育に関して「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の先行研究を調べたところ、モジュール授業を活用した主体的学びを促す文法指導（川村・岡村，2016）や主体的・協働的な学びを可能にする英語授業のデザイン（井上，2018）など、「主体的」な学びを促す研究があった。しかし、これらの研究の中では、子どもの「主体的」な姿の具体をどのように捉えているかについての詳細な記述は見られなかった。

大学院に入学する前に行った「Our Talk On the News」【2年生】（実践①）では、英語で書かれた短い新聞記事を読み、互いの考えたことや感じたことを伝え合う言語活動を行った。この実践を振り返ると、生徒は互いの考えや感想を伝え合い、積極的にコミュニケーションを図ろうとすることはできていた。この実践の中では、「積極的な姿」に私の意識が向き、やり取りをどのように継続させるかということばかりに目が向いてしまっていた。改めて振り返ると、先述した学校教育外で学び続けようとする姿や、粘り強く取り組む姿、自らの学習を調整しようとする姿が具現されていたか疑問に思った。そこで、実践を重ねながら「主体的」な生徒の姿とはどのような姿なのかを探ろうと考え、以下の研究問題を

設定した。

研究問題

- ①生徒の「主体的」な姿とはどのような姿であると教師は捉えていけばよいか。
- ②①で見いだした生徒の「主体的」な姿を具現するために、英語の授業や単元はどうあったらよいか。

2. これまでの実践と振り返り

2年間の実践を通して、研究問題に対して以下のように捉えるようになった。

研究問題①に対する答えは「英語の世界に自分から向き合おうとしていく姿」と考える。教室の中の限られた世界だけではなく、今、世界のどこかで起きている、または起きようとしていることについて考えていくことが、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとする態度につながっていくのではないかと考える。

研究問題②に対する答えは、「人」が関わる授業や単元を位置付けていくことであると考える。その「人」は、時代や生徒の実態によるが、友や家族、ALT、教師などの身近な人物など、同じ時を共有している「人」、共有していきそうな「人」を関わらせていく授業や単元を位置付けていくことが、生徒の「主体的」な姿につながっていくのではないかと考える。このように捉えるようになった経緯を、取り組んだ実践を紹介しながら説明する。

2.1 「Messages from Hiroshima」【3年生】（実践②）

実践①の成果と課題を踏まえ、目指す生徒の「主体的」な姿を、「問いをもち、粘り強く会話を継続しようとしたり、自己調整しようとしたりすること」として、「Messages from Hiroshima」を行った。そこでは、S生の外国人の友へ、広島への被爆の様子を伝えるために手紙を書くという単元のゴールを設定した。生徒は総合的な学習の時間に平和学習を行ったり、修学旅行で広島を訪れたりしていたため、手紙にどのような内容を書いたらよいか問いをもち、教科書の内容を読んだり、友と考えを伝え合ったりした。生徒は、友とのやり取りを通して、“When I read a story of Sadako, I felt our lives and family are very important. I must do something.”など、自分の考えを手紙に書くことができた。

このように、生徒は問いの解決に向けて、粘り強くやり取りをするとともに、授業を振り返って自己調整をしながら、自らの考えを深めていく姿が見られた。しかし、外国に住むS生の友は、生徒一人一人にとっては関わりがなかったり、具体的にどのような人物か分からなかったりしたため、目的や場面、状況を具体的にイメージすることができず、自分との関わりの中で考えることに課題が残った。

2.2 「English for Me」【3年生】（実践③）と「I Have a Dream」【3年生】（実践④）

実践②の成果と課題を踏まえ、目指す生徒の「主体的」な姿を「対象を自分事として捉え、誰かに伝えたい、もっと知りたいと願うこと」とし、「English for Me」を行った。自分にとっての英語とはどのようなものかについて、互いの考えを伝え合うために、難民キャンプで働く医者、外国に米を輸出している農家、研究を進めている大学生にとっての英語

とはどのようなものかについて、英文から読み取ったことを伝え合った。そして、生徒は、それぞれの人物にとっての英語とはどのようなものか、経験を踏まえながら、“English is a chance for me. I want to speak English well in the future. If I can speak English well, I will be needed by someone or company. It means ‘help’.”などと、自分と英語との関わりを捉え、自分の考えを伝えたい、相手の考えを知りたいと願い、学習に取り組んだ。

このように対象を自分事として捉えることを、自分の身の回りに関する日常的な話題だけではなく、社会的な話題についても実践することができないかと考え、「I Have a Dream」を行った。そこでは、新型コロナウイルス感染症が感染拡大する中、3人の黒人男性が、警察官に対する抗議デモの在り方について口論している場面の映像を視聴した。その後、異なる姿勢をとる人々の行動から、“Why are these men taking these actions?”と、単元の問いを設定し、アメリカの人種隔離政策に関する英文を読んだり、白人に席を譲ることを断ったローザ・パークスさんの心境やキング牧師の思いについて、考えたことや感じたことを伝え合ったりした。

その中である生徒が、“I watched some videos about demo in America. (. . .) I felt like he was crying. We should think these problems all over the world.”と、自分の考えを日記に書いた。また別の生徒は、黒人差別問題に関する英字新聞を読み、“I am going to study about the problem and the history of the discrimination. I hope that every country become peace.”など、自分の考えや感想を家庭学習のノートに書いた。2人の生徒に、このように授業外において自ら考えを書いた理由を尋ねると、「自分は世界の中の一つ、世界の一員として向き合う必要がある。英語で書くことで、世界に少し向き合える気がした。」といった内容の答えが返ってきた。遠いアメリカのことではあるが、同じ地球上で同じ時間を生きている「世界の一員である自分」として、対象を自分事として捉える姿であった。

このような生徒の姿は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」にとどまらず、「学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとする態度」につながるのではないかと考えた。

2.3 My Hot Spot Guide【2年生】(実践⑤)とChristmas Present【1年生】(実践⑥)

実践③と実践④を終え、目指す生徒の「主体的」な姿を「英語の世界に自分から向き合おう」としていくこと」として、1年生、2年生において実践を行った。

まず、2年生の実践「My Hot Spot Guide」では、ALTの家族が長野を訪れる際に、どのような場所をおすすめスポットとして紹介したらよいかを考えて提案する学習を行った。これまでには目的や場面、状況を教師が提示することが多くあったが、ここでは、生徒が自らALTに質問し、目的や場面、状況を捉えていくことができるような場面を設定した。生徒は、ALTに“Who is coming to Japan?”や“Are they interested in shopping?”と質問し、アドバイスをする視点を得ながら、自分と長野県との関わりから、ALTにおすすめスポットを紹介するガイドを作成していった。

1年生の実践「Christmas Present」では、ALTがALTの子どもにどのようなクリスマスプレゼントをしたらよいかについて考えを伝え合う学習を行った。ここでもALTに、ALTの子

もたちがどのようなことに興味があるのかを尋ねたり、ALT自身の希望を尋ねたりしながら、目的や場面、状況を捉え、“Disney Princes doll or Disney ticket are good because she likes Disney.”など、相手に応じたよりよいプレゼントを考えていく姿が見られた。

このように、同じ時を過ごしている「人」について思いを馳せていくことで、その時の生徒にとっての世界に向き合い、「主体的」にコミュニケーションを図ろうとする姿につながっていくのではないかと考える。

4. 2年間の実践と省察を振り返って

2年間を通して、目指す生徒の「主体的」な姿を問い続けて実践を繰り返すことで、生徒と教材をどのように出会わせていくか、そこにどのような教師の関わりが必要なのかを振り返りながら授業や単元を構想することができた。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を「主体的」な生徒の姿と捉えていた時には、やり取りをどのように継続させるかということばかりに目が向いてしまっていたが(図1)、教材化を考えていく過程で、自分自身が、生徒が考えをもつに至った「背景」や生徒の「人となり」そのものを知りたいと願うようになっていった(図2)。亀谷(2020)は、生徒が受信したことを自分と結び付けて考え、それを伝え合うことが、言葉を使ったその先にあるものを仲間と共に創ろうとする力になると述べている。生徒が英語を学ぶだけではなく、英語を使ったその先にあるものと出会い、創造していくことができるような授業や単元をさらに構想していきたい。

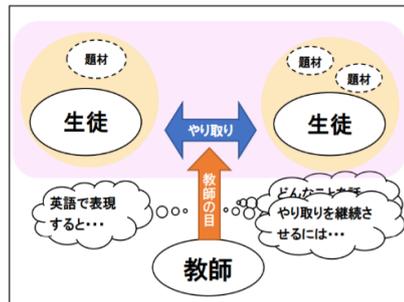


図1 やり取りに目を向ける



図2 やり取りとその背景に目を向ける

文 献

- 井上真唯也. (2018). 「主体的・協同的学びを可能にする英語授業のデザイン」 教育システム研究開発センター 『13』, 263-269.
- 亀谷みゆき. (2020). 「新しい時代の英語教育を考える：『主体的・対話的で若い学び』への授業改革」 『朝日大学教職課程センター研究報告』 22, 17-19.
- 川村一代・岡村里香. (2016). 「モジュール授業を活用した主体的学びを促す文法指導」 『中部地区英語教育学会紀要』 45, 45-52.
- 文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 開隆堂.
- 文部科学省・国立教育政策所教育課程研究センター. (2019). 『学習評価の在り方ハンドブック』 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-01.pdf